第4回企画展

中島 敦とその家系

祖母八十初度寿筵(大正4年8月)

1996年2月20日(火)～3月24日(日)

久喜市公文書館

「中島敦とその家系」を開催するにあたって

当館は、平成５年10月に開館して以来、「歴史資料として重要な市の公文書その他の記録」を保存し、これらを計画的に整理・公開していくことを主な業務としております。

この公開は、実際に利用者の皆様が手にとって閲覧していただくことを原則としていますが、その一方で年２回の企画展も催しております。

４回目を迎える今回は、「中島敦とその家系」を開催することにいたしました。

『山月記』や『李陵』等の作品で知られる中島敦は、祖父母が本市に住んでいた関係で、２歳から小学校に入学する前までの一時期を本市で過ごしております。

また、敦の死後には妻タカや子供たちも戦火を避け本市に疎開し、昭和30年代頃までは本市で暮らしていたようです。

一方、祖父や父、伯父たちは本市を中心にこの辺り一帯に大きな影響を残しています。

祖父は亀田鵬斎流の書を伝える有名な学者で、その学風は「皇漢学」といういわば国学と漢学の研究を主とするものでした。

祖父や伯父たちが、この皇漢学を教える目的で当地に設立したのが「幸魂教舎」「言揚学舎」「明倫館」といった教育施設です。これらの学校からは、後に首長や議員になるような人たちもたくさん卒業していきました。

また、敦の作品にもその影響は明らかで、『山月記』や『李陵』等の作品に見られる完成度の高い美しいリズムは、しっかりとした漢学的素養を身につけていた敦だからこそ創造できたのではないでしょうか。

今回の展示では，中島敦、祖父慶太郎・父田人・伯父端蔵・伯父竦之助の５人についての資料を中心に構成し、本市との関係についても紹介してみました。

最後になりますが、今回の展示を行うにあたりましてご協力をいただきました多くの関係者の方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成８年２月

久喜市公文書館長

主な参考文献

郡司勝義「『斗南先生』逸時―中島敦の伯父・中島竦―」（『ちくま』76，1976）

村山吉廣「中島敦とその家學―鵬斎門流の中島撫山―」（『中国古典研究』22、1977）

中村光夫／氷上英廣／郡司勝義編『中島敦研究』（筑摩書房、1978）

久喜市・鷲宮町両教育委員会『撫山中島家蔵書目録』（1978）

佐々木充「中島敦の出自について」（『方位』2、1981）

村山吉廣「中島敦とその家學（続）―祖父撫山及び三人の伯父―」（『中国古典研究』27、1982）

鷲宮町教育委員会調査報告書第二集『中島撫山小伝』（1983）

村山吉廣「中島撫山の“幸魂教舎”」（『漢文教育』創刊号、1985）

木村一信「『斗南先生』―成立とその意義―」（『中島敦論』所収、1986）

村山吉廣「家系・教養―「家学を中心に」」（勝又浩／木村一信編『昭和作家のクロノトポス　中島敦』所収、1992）

Ⅰ　中島敦と久喜

『斗南先生』

利根川べりの田舎

主人公三造（＝敦）の目を通して、昔風の漢学者気質と狂熱的な国士気質をもつ「やかまの伯父」（＝斗南先生）が語られていく。

子供の頃の三造は、親戚の多くからこの「やかまの伯父」の気質と似ているといわれたことを苦々しく感じていたと同時に、この伯父に対してほとんど愛情を抱いてはいなかった。

12年後、既に故人となっていた伯父について思い出すのは意地の悪いことばかりであるといいながら、このようなひねくれた気持ちの中に「余りに子供っぽい性急な自己反省」と「自分が最も嫌っていた筈の乏しさ」が見え隠れしていることに気付き始める。

しかし、さらに10年を経過すると、「最早滑稽な羞恥としか映らない」といえるほど、伯父を１人の人間として客観的に評価できるようになっていた自分に驚くのである。

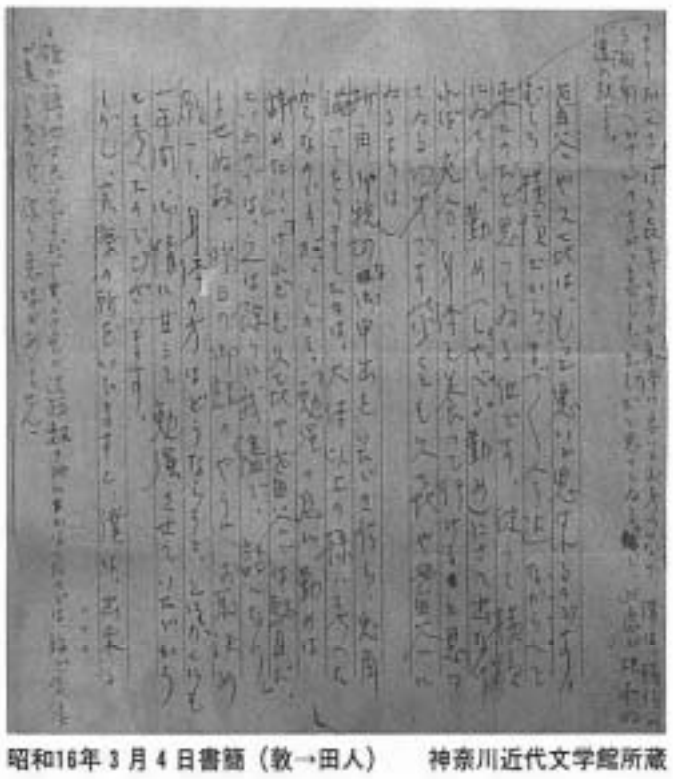
この小説に出てくる、三造（＝敦）、やかまの伯父、お髭の伯父、渋谷の伯父、洗足の伯父等は皆実在の人物で、敦が育った父方の一族を、敦自身がどのようにみていたのかがわかる作品でもある。

敦は、本市のことを小説『斗南先生』の中では「利根川べりの田舎」と記しています。

しかし、昭和12年には「生まれは東京。その後処々を放浪。従って、故郷という言葉のもつ（と人々のいう）感じは一向わかりません。」と書いています。

転地療養と文学に専念することを真剣に考え始めた昭和16年には、父が久喜で療養することを勧めたのに対し、敦自身はそれを嫌っていることが書簡からみてとれます。

また、転地療養も兼ねて就職した南洋庁で、父がわざわざ贈ってくれた「久喜の駄菓子」を喜ぶ書簡も残っています。



昭和16年３月４日書簡（敦→田人）　神奈川近代文学館所蔵

昭和16年９月２日書簡（敦→タカ）　神奈川近代文学館所蔵

II　中島　敦（あつし）(1909—1942)

明治42年５月５日生。東京の四谷簞笥町（現新宿区）で、父田人・母チヨの長男として誕生します。

喘息の発作により昭和17年12月４日永眠。満33歳。

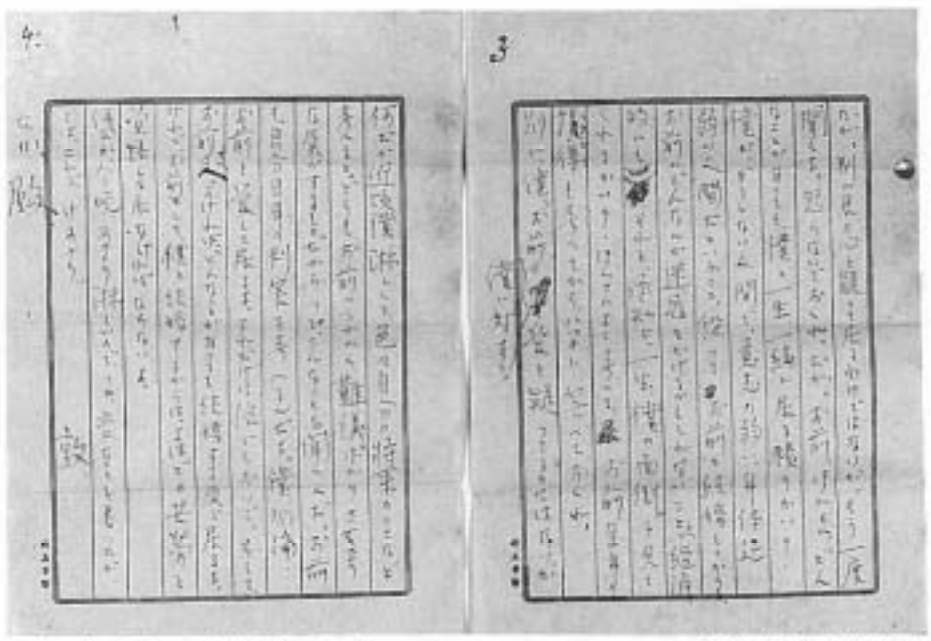
父方の一族がもつ漢学的素養と、敦自身が求めた西洋的知性とをベースにして、優れた小説を著しています。

また、残された資料からは、花を愛し、絵や詩を嗜み、子供好きで、情熱家といった敦の一面もかいまみることができます。

中島敦筆「自画像」　神奈川近代文学館所蔵

中島敦筆「横浜風景」　神奈川近代文学館所蔵

妻タカと長男桓　中島　桓所蔵



昭和７年１月10日書簡（敦→タカ）　神奈川近代文学館所蔵

＝中島　敦の主な作品＝

『過去帳』

この作品は、自己のアイデンティティを求めて焦燥する日常を書いた『かめれおん日記』と、日常における生に対する不安を描いた『狼疾記』という２作品から成り立っています。『斗南先生』と同じように敦自身が投影された作品になっています。

『光と風と夢』

この作品は、『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』等の作者として知られる作家スティーヴンソンの晩年を、伝記としては従来例のないスタイルで書き上げています。昭和17年度上半期の芥川賞候補にもあがり、中島敦の出世作となった作品。

『山月記』（さんげつき）

この作品は、才能があるにもかかわらず臆病な自尊心と尊大な羞恥心をもっていたため世間と隔絶することになった李徴が、ある日突然虎に変身してしまうという作品です。国語の教科書にも採用されたことのある、中島敦の代表作。

『李陵』（りりょう）

この作品は、『漢書』や『史記』などの史書をもとにして、李陵・司馬遷・蘇武の三者三様の生きざまを、その歴史背景とあわせてダイナミックに描いた作品。中島敦の最高傑作とも言われています。

なお、「李陵」という題名は、敦の死後深田久弥によって命名されたものです。

「李陵」原稿　　神奈川近代文学館所蔵

「李陵」浄書原稿　　神奈川近代文学館所蔵

III　祖父　中島慶太郎（1829—1911）

本名は「慶太郎」。通称は「慶」、字は「伯章」、号は「撫山」と称しています。また、「佐知（致）麻呂」「さちまろ」等の別号も用いています。

文政12年４月12日生。同年３月の大火で日本橋新乗物町（現中央区）の本宅が焼失したために、祖父の隠居宅があった亀戸（現江東区）で誕生します。

明治44年６月24日永眠。満82歳。墓は市内の光明寺にあります。

＝撫山先生＝

亀田綾瀬の門に入り、綾瀬没後はその養嗣子鶯谷に師事します。また、亀田家学の基を築いた亀田鵬斎の研究家でもあります。

その学風は、鶯谷が唱えた神道と儒学との一致を図る神典聖教一致説に基づく「皇漢学」というもので、その生活ぶりは清貧な学究的態度で一貫していたようです。

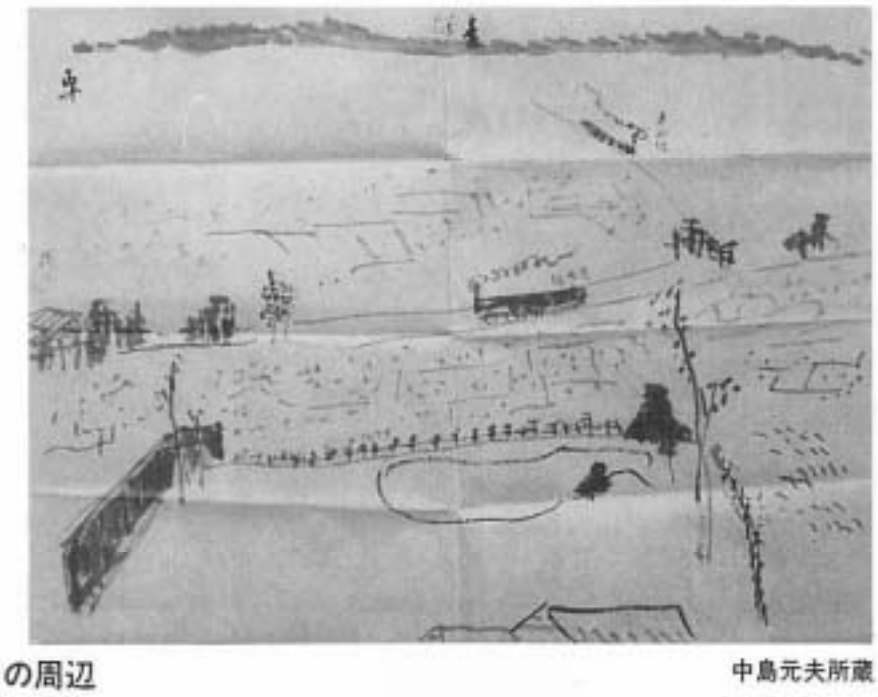
慶太郎30歳の時、両国（現墨田区）に「演孔堂」という塾を開きますが、その10年後、江戸から明治へと移り変わろうとする時代の混乱を避け江戸を離れます。

明治２年に久喜本町（現本町６丁目）に居を構え、明治６年には自宅において生徒を集め教えを説くことを願いでています。おそらく、これが「幸魂教舎」のはじまりだと思われます。

明治９年には、入門生が多くなってきたことから、教室を１室増築しています。

この久喜本町の建物は、明治42年の転居の際に久喜新町（現中央２丁目）に移され、その後老朽化しながらも現在までその姿を残しています。

明治42年10月26日書簡（慶太郎→妹之助）より



久喜新町宅とその周辺

中島元夫所蔵

IV　父　中島田人（たびと）（1874—1945）

明治７年５月５日生。久喜本町（現本町６丁目）で、父慶太郎・母きくの５男として誕生します。

昭和20年３月９日永眠。満70歳。

＝田人先生＝

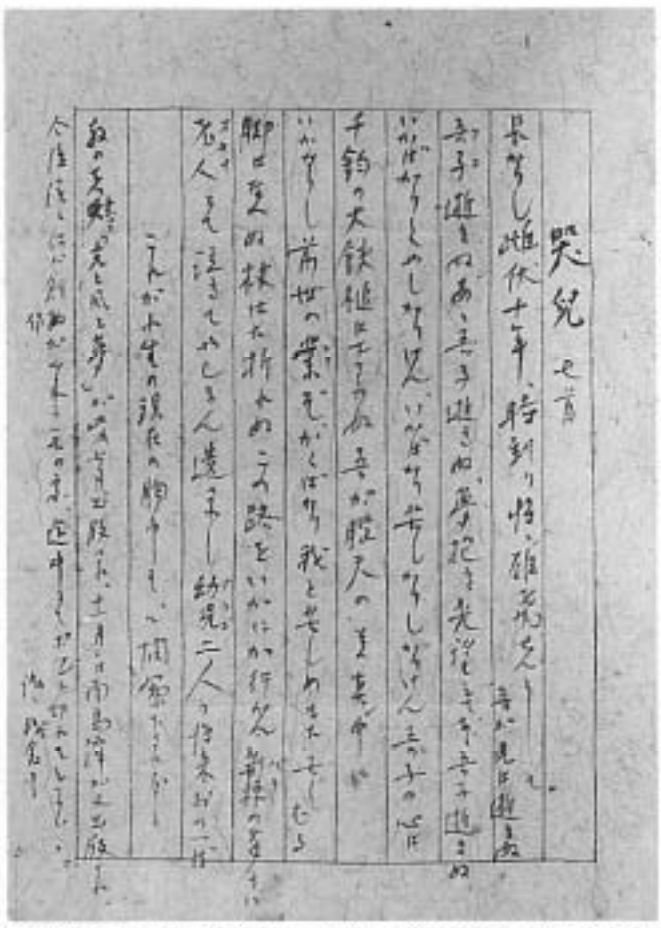
「漢学と囲碁のほかは何もできぬ好人物だった」といわれるように、田人はその一生を学校の先生で終えています。

また、子煩悩であったといわれる田人にとって、敦が早逝した時の悲しみは大変なものでした。その時の胸中を詠んだのが「哭児」です。

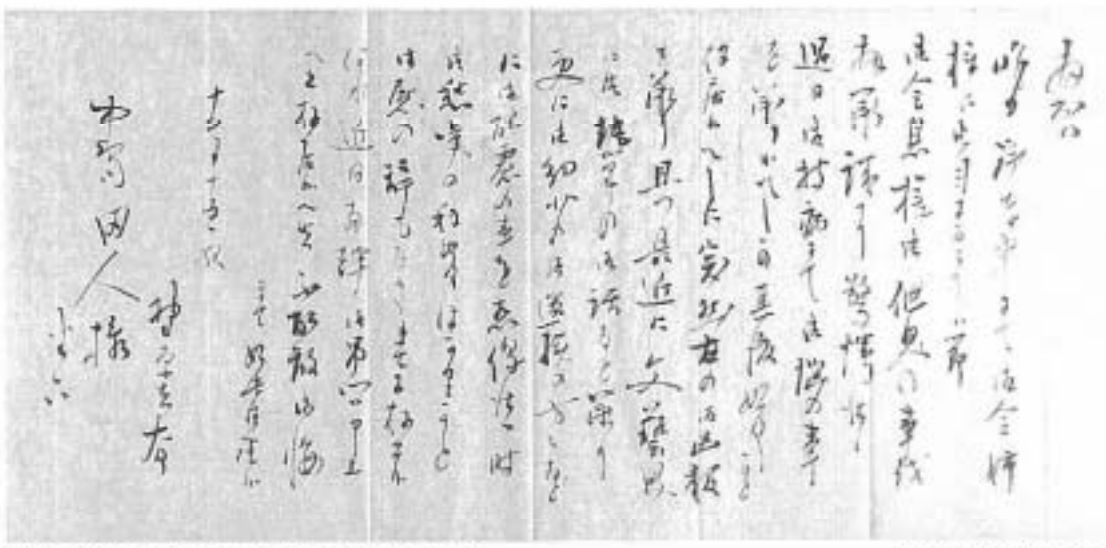
本市との関係でみると、父慶太郎が亡くなった後、言揚学舎の舎主として県に廃校届を提出しています。

また、明倫館では明治31年１月から１年間、教員としてその任にあたっています。

神奈川近代文学館には、久喜町（現久喜市）の野原吉太郎と榎本善兵衛が、敦逝去を悼んで田人にあてた書簡が残されています。そこには、「田人先生」の言葉等も見え、住民との交流がうかがえる資料になっています。



昭和17年12月18日書簡（田人→吉村睦勝）　神奈川近代文学館所蔵



昭和17年12月15日書簡（野原吉太郎→田人）　神奈川近代文学館所蔵

昭和17年12月22日書簡（榎本善兵衛→田人）　神奈川近代文学館所蔵

V　伯父　中島端蔵（たんぞう）(1859—1930)

本名は「端蔵」。通称は「端（まさし）」、字は「儼之」、号は「斗南」と称しています。また、「勿堂」「復堂」等の別号も用いています。

安政６年１月26日生。父慶太郎・母きくの長男として誕生します。

小説『斗南先生』の中心人物でもあり、甥や姪からは「やかまの伯父」と呼ばれていた人です。

昭和５年６月13日永眠。満71歳。

＝斗南先生＝

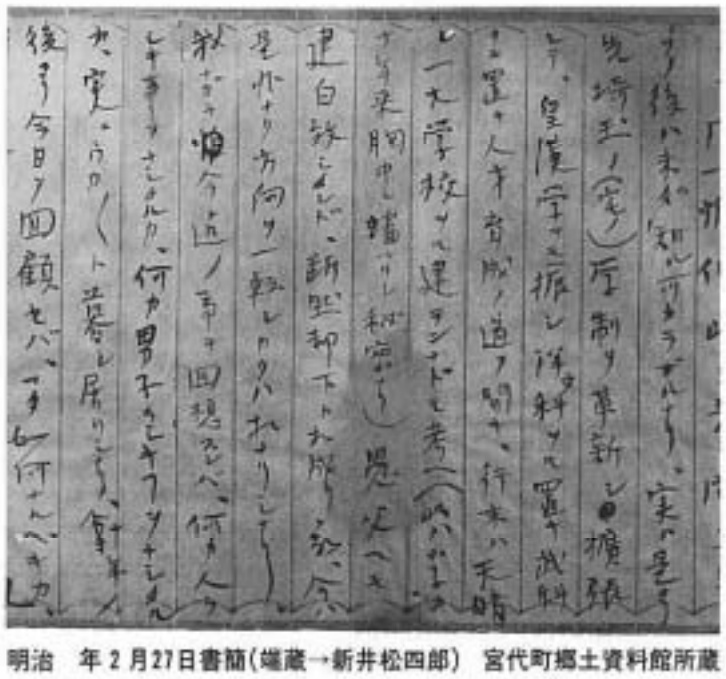
明治15年端蔵24歳の時、言揚学舎の舎主となり、その後数年して竦之助に跡を譲っています。

明治26年35歳の時には、江面村（現久喜市）に明倫館を設立し仮教場宝光院で開校します。明倫館では明治32年３月まで初代館長の任に就き、その後を宮内翁助(後の国会議員)に引き継いでいます。

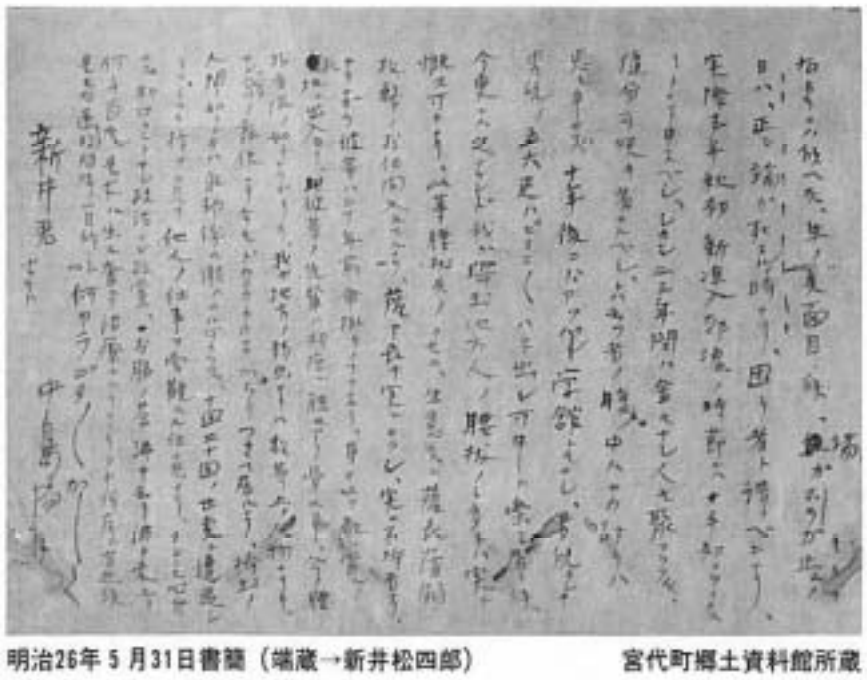
宮代町郷土資料館には、明倫館を設立する頃の端蔵の素直な気持ちが書かれた書簡が数点残されています。そこには、「東西学術ノ異同根源ヲ研究シ一新案ヲ大完センノ覚悟」とか「埼玉ノ（宅ノ）学制ヲ革新シ拡張シテ皇漢学ヲモ振シ洋文科ヲモ置キ武科ヲモ置キ人才育成ノ道ヲ開キ」等とあり、西洋的知識を吸収する必要性も感じていたようです。

敦は小説『斗南先生』の中で伯父が妻をめとらなかった理由はわからないと書いていますが、この頃端蔵に婿の話がきていて困惑していることもこれらの資料からうかがえます。

また、埼玉地方人のふがいなさに対する批判も端蔵らしい口調で行っています。



明治　年２月27日書簡(端蔵→新井松四郎)　宮代町郷土資料館所蔵



明治26年５月31日書簡（端蔵→新井松四郎）　宮代町郷土資料館所蔵

VI　伯父　中島竦之助（しようのすけ）(1861—1940)

本名は「竦之助」。通称は「竦(たかし)」、字は「翹之」、号は「玉振」と称しています。また、「蟓山」等の別号も用いています。

文久元年５月22日生。父慶太郎・母きくの次男として誕生します。

小説『斗南先生』では、「お髭の伯父」として登場し、田人の書簡では「善隣の伯父」、森鷗外の小説『羽鳥千尋』の中では「中島蟓山」として登場しています。

昭和15年６月11日永眠。満79歳。

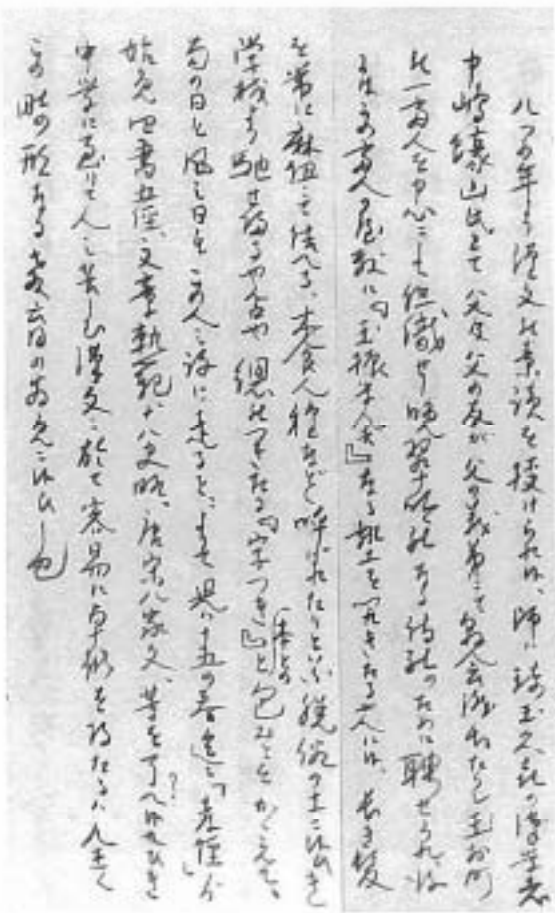
＝玉振先生＝

父慶太郎の学風を一番素直に継承したのが竦之助であったように思われます。兄端蔵は、その書簡の中で自分と弟竦之助とを比較して次のように述べています。

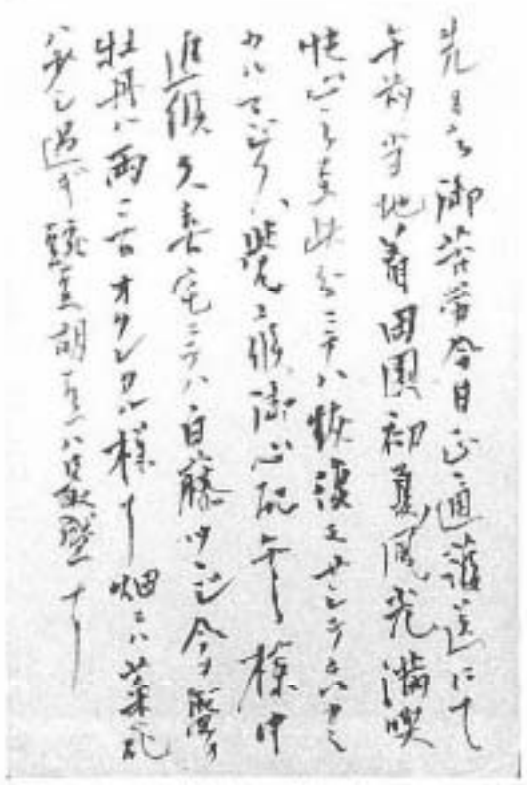
> 自カラ顧ルニ百事竦ニ及バズ、但竦ハ小心翼々敢テ異ヲ求メズ肯テ新ヲ立テズ、倒レテ復タ起キ屈セズ沮マズ恥ル所ヲ知ラザルガ如キニ至リテハ端一日ノ長アルニ似タリ此レ端ガ今日責任者トシテ衆言喧々ノ衝ニ当レル所以ンナリ　守成ニ至リテハ竦最モ適セリト為ス
>
> 『中島敦研究』所収明治27年４月２日書簡（端蔵→若之助）より）

本市との関係では、明治20年（又は18年）に言揚学舎の舎主を端蔵から引き継いでいます。また、明倫館でも嘱託教員として設立当初からその任にあたっています。

昭和15年５月に敦にあてたはがきには、「田園初夏ノ風光満喫快心之至」と書き、続けて「久喜宅ニテハ白藤ツツジ今ヲ盛リ牡丹ハ両三日オクレタル様ナリ　畑ニハ菜花ハ少シ過ギ豌豆胡豆ハ最盛ナリ」等と、久喜の様子をこと細かに伝えています。



明治43年７月29日書簡（羽鳥千尋→森林太郎）日本近代文学館所蔵



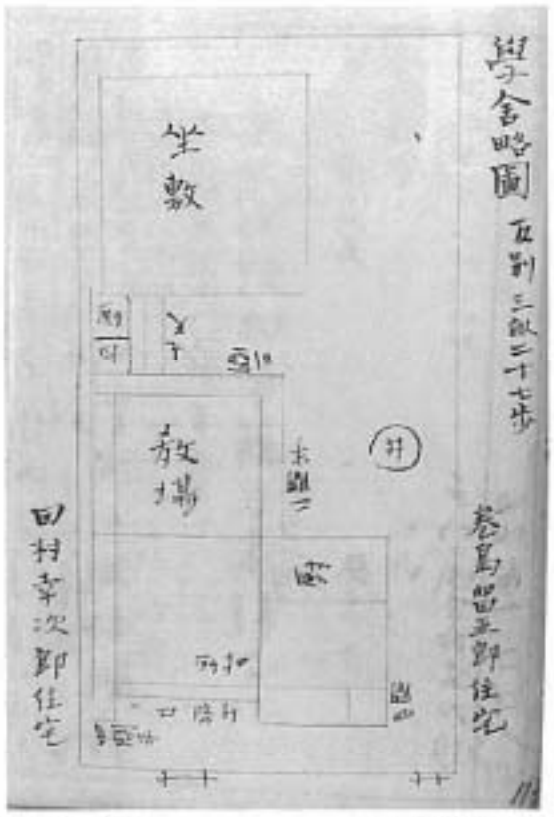
昭和15年５月２日はがき（竦之助→敦）神奈川近代文学館所蔵

Ⅶ　市内に残る足跡

慶太郎が初めて久喜の地に居を構えた久喜本町宅とその後移り住んだ久喜新町宅、それに慶太郎の墓がある光明寺、また端蔵が創立した明倫館の最初の仮教場であった江面の宝光院とその後建てられた明倫館を紹介します。

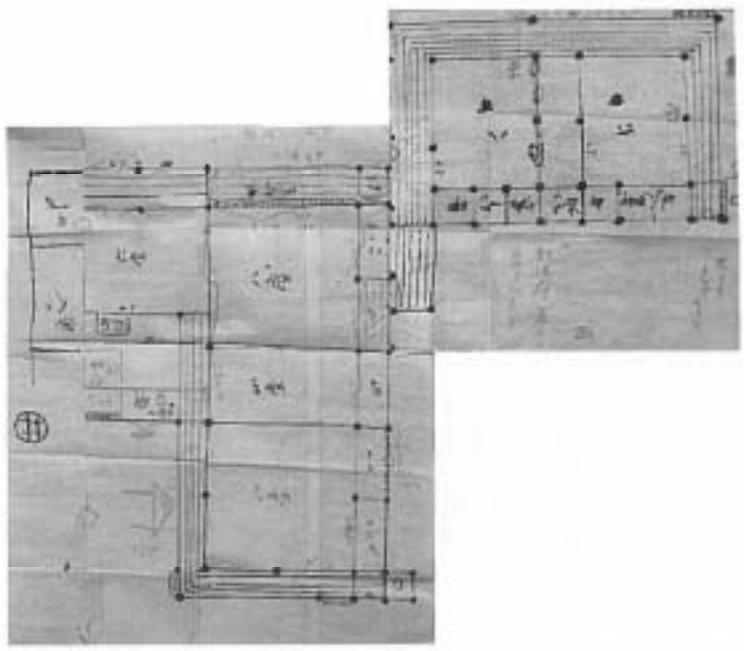
このうち現在までその姿を伝えているのは久喜新町宅と慶太郎の墓、それに本堂を新築した宝光院の３ヶ所です。

この他、市内のあちこちに、慶太郎が書いた金石や絵馬、書等が残されています。



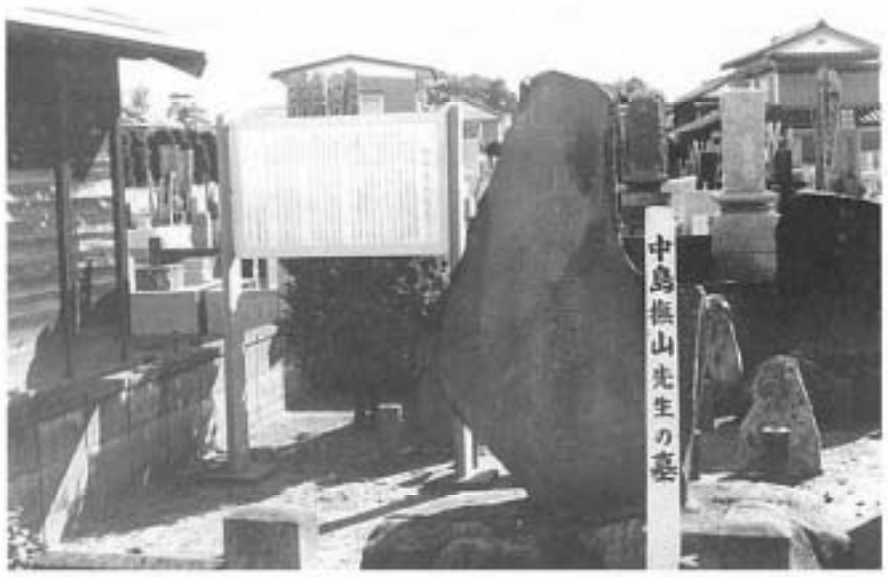
久喜本町宅　　現本町６丁目

明治20年10月25日私立皇漢学専門学校設置願(峰之助→県) 埼玉県立文書館所蔵



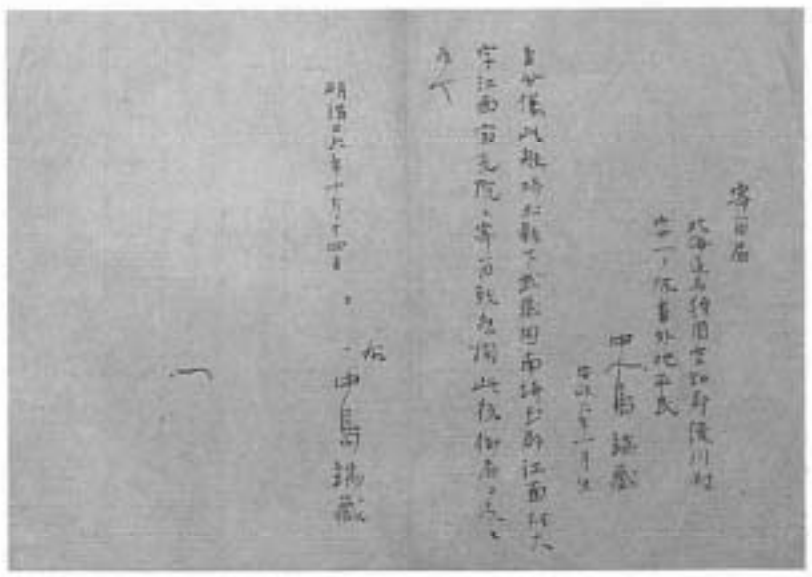
久喜新町宅　　現中央２丁目

明治42年９月19日書簡（慶太郎→峰之助）　中島元夫所蔵



光明寺　　現本町1丁目

中島撫山の墓



宝光院　　現大字江面

寄留届　　中島元夫所蔵

明倫館　　現大字下早見

嶋田　実所蔵

展示資料一覧

I　中島敦と久喜

1　写真パネル　昭和16年２月26日書簡（敦→田人）
2　写真パネル　昭和16年３月４日書簡（敦→田人）
3　写真パネル　昭和16年９月２日書簡（敦→タカ）
4　写真パネル　昭和16年９月13日書簡（敦→田人）
5　『斗南先生』原稿

II　中島　敦

6　写真パネル　中島敦と長男桓　本郷町の家にて
7　写真パネル　おれんちのぱんじい
8　写真パネル　シクラメンとクロッカス
9　写真パネル　横浜風景
10　写真パネル　青ヶ島遠望
11　昭和７年１月10日書簡（敦→タカ）
12　昭和７年１月22日書簡（敦→タカ）
13　昭和16年７月　日書簡（敦→桓）
14　昭和16年９月15日はがき（敦→桓）
15　昭和16年９月19日はがき（敦→桓）
16　昭和16年９月28日はがき（敦→桓）
17　『光と風と夢』原稿
18　『和歌でない歌』原稿
19　『李陵』原稿
20　『李陵』浄書原稿
21　写真パネル　祖母八十初度寿莚（大正４年８月）

III　祖父　中島慶太郎

22　写真パネル　中島慶太郎
23　亀田鵬谷筆「演孔堂」（額）
24　『演孔堂詩文　上下』
25　亀田鵬斎書（軸）
26　亀田綾瀬書（軸）
27　亀田鵬谷書（軸）
28　中島撫山書（軸）
29　亀田鵬谷筆「幸魂教舎」（額）
30　写真パネル　明治６年９月願（慶太郎→県）
31　『亀田三先生伝実私記　全』
32　中島撫山書（軸）
33　中島撫山書（軸）
34　明治42年10月26日書簡（慶太郎→竦之助）

IV　父　中島田人

35　写真パネル　中島田人とチヨ
36　昭和17年12月18日書簡（田人→吉村睦勝）
37　写真パネル　明治44年７月30日廃校届（田人→県）
38　昭和17年12月15日書簡（野原吉太郎→田人）
39　昭和17年12月22日書簡（榎本善兵衛→田人）

V　伯父　中島端蔵

40　写真パネル　中島端蔵と新井松四郎
41　勿叔筆「哭阿睦」
42　斗南遺詠（色紙）
43　写真パネル　明倫館館長履歴書
44　明治　年２月27日書簡（端蔵→新井松四郎）
45　明治26年５月31日書簡（端蔵→新井松四郎）

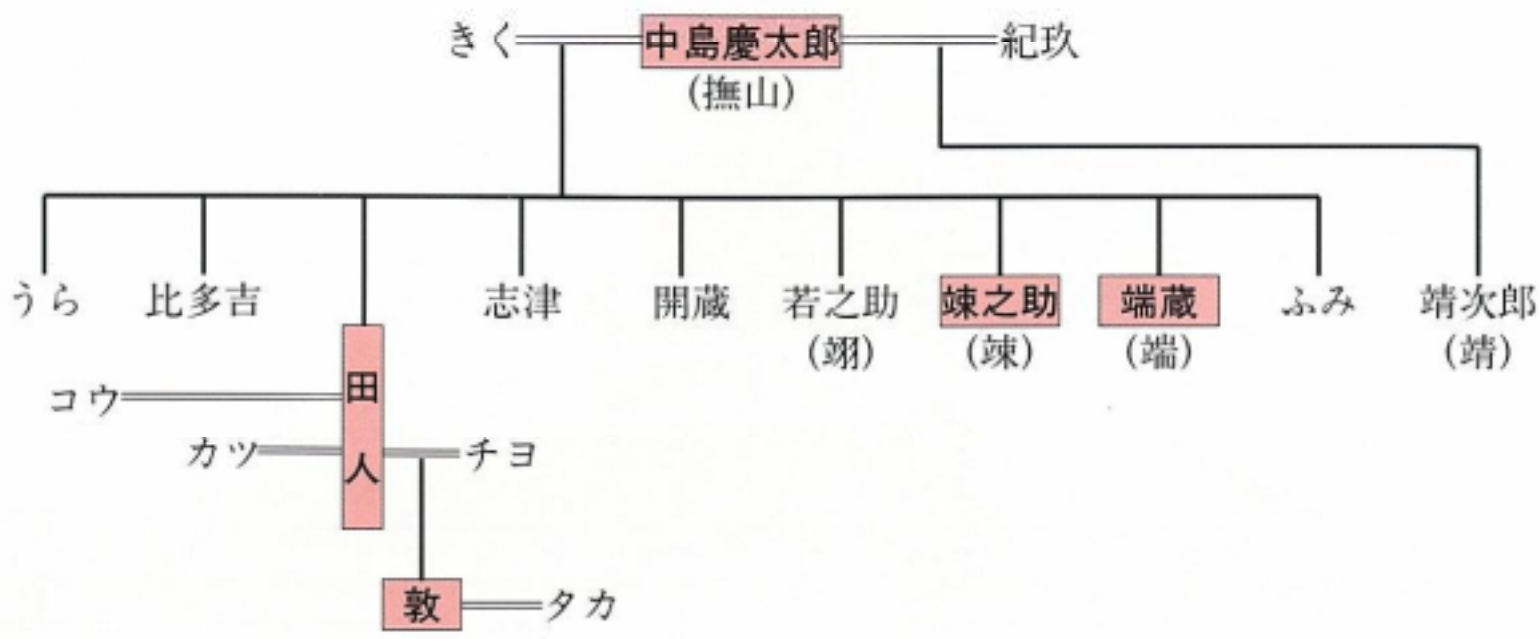
VI　伯父　中島竦之助

46　写真パネル　中島竦之助　晩年の伯父竦
47　玉振道人書（額）
48　玉振道人書（軸）
49　玉振道人書（軸）
50　昭和15年５月２日はがき（竦之助→敦）
51　写真パネル　明倫館嘱託教授履歴書

VII　市内に残る足跡

52　写真パネル　久喜本町宅
53　写真パネル　久喜新町宅
54　写真パネル　光明寺
55　写真パネル　宝光院
56　写真パネル　明倫館

中島家略系図



表紙写真説明

一番前の左端で膝の上に座っている子供が敦6歳、膝の上に乗せているのは継母カツ、一番後で立っているのが左から順番に田人40歳、比多吉、若之助（渋谷の伯父）、端蔵56歳（やかまの伯父）、開蔵（洗足の伯父）、竦之助54歳（お髭の伯父）です。一番前で一人で座っているのが祖母きくにあたります。

協力者（敬称略・順不同）

神奈川近代文学館、埼玉県立文書館、日本近代文学館、宮代町郷土資料館、内田貞一、折原澄子、川瀬覚藏、嶋田実、佐久間照夫、田口閲藏、田鍋幸信、田村昌一、中島桓、中島元夫、中村周保、早川えつ子、宮本みつ、山口多喜次、武井尚、中島甲臣、山本良知

公文書館利用案内

開館時間：9：00～17：00

休 館 日：土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始
（企画展の期間中は、日曜日も開館します）

交通案内：JR 宇都宮線・東武伊勢崎線
久喜駅西口下車徒歩17分（市役所西側）

発行：平成8年2月　編集：久喜市公文書館　〒346 久喜市下早見85-1　☎ 0480-23-5010